

# 本を選ぶ

NO.458 2023年(令和5年)7月20日

●発行/ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<くろん・ぼわん>指先の話 続々

●司書の眼 第52回

―常に満たされた状態で記憶として結晶化される―



●●●●●**ろん・ぼわん**●●●●●

## 指先の話 続々

人間の指先の感覚の鋭さはなんと最大 10 ミクロンの厚みの差を判別して感じ取る能力があるようだ。そんな熟練の職人でなくとも、3 ミクロン (0.003 ミリメートル、または 3 マイクロメートル ( $\mu m$ )) 程度の厚みの差なら感じ取れるかもしれない。厚みのみならず微妙な感触、いわゆるタッチの反応や力の加減、そっと叩いた時の反応など指先の感覚が生み出す鋭さや多様性は相当なものだ。少なくとも現状では人間の指先の力加減のロボット化は難しいと思われる。

バイオリンやビオラ、チェロなどの弦楽器は、さつげん擦弦楽器と呼ばれる。楽器本体に張りわたした弦を弓でこす擦って音を出すからだ。正確には弓に張った毛で弦を擦る、と言うべきか。弓は凹状に反らせ湾曲した棒状の本体と両端に張りわたされた馬の尻尾からなる。しかし、それだけでは弦を擦っても音を出せない。弓毛にまつやに松脂をこすりつけなければならない。これでやっと楽器が発音する。

この松脂がなくては楽器は発音しない。つまり松脂を与えた馬の尻尾を張った弓がなければ、楽器演奏として成立しないのだ。

さらには指先の感覚を研ぎ澄ます訓練と天才的な感受性と音感の持ち主には優れた弓が必要とな

る。18 世紀から 19 世紀にかけてフランス人の弓職人フランソワ・トゥルテラがブラジル特産のフェルナンブーコという材料ですばらしいバイオリン弓を制作して以来、フェルナンブーコは弓の材料として唯一無二の素材となった。「バイオリン、それはすなわち弓である」と、当時の名バイオリスト、ピオットィがのたもうたそうだ。この逸話が事実かどうかは怪しいとしても、ずばり究極を突いている。

では弦はどうなのかを知ろうとすると音楽事典くらいで、案外資料は見つからない。ウェブをたどると、楽器制作者たちや楽器店のサイトにたどり着く。そんな中で出遭った優れた仕事が『ヴァイオリン属ガット弦の変遷』(ダニエラ・ガイダーノ著/八木健治訳/2019) だった (高倉匠弦楽器工房の扱いになっているが、発行元は不明)。ついでながら訳者の八木健治氏は『羊皮紙の世界：薄皮が秘める分厚い歴史と物語』(青土社/2021) の著者で、日本における羊皮紙研究の第一人者と言う人物。

もともとさつげん擦弦楽器の弦はガット弦つまり羊の小腸を撚ったものから始まった。八木氏が訳者を引き受けたのは素材である羊を知り尽くしているからなのか。さすがに現代はバイオリンでは4本のうち一番高い音のE線はスチール弦で他の3本はナイロン弦が主流となった。

ガットとは英語では gut。ガッツのある奴だ、と言うときのあのガッツ。ガッツ石松さんあるいはホルモン焼きのガツでもおなじみだ。(埜村 太郎)

# 司書の眼 第52回

—— 常に満たされた状態で記憶として結晶化される ——

鷹野 祐子

## 18年ぶりの改訂

日頃忙しい研究生活の中で、美味しいものが手に入ったよと気にかけて図書室に立ち寄ってくれる研究者の著書の改訂版がこの度医学書院から出版されるという。この文章を皆さんが読んでおられる頃にはもう書店に並んでいる。「初版を出してから、ここを修正したい、この写真は取り直したい」と思っていて、その準備に結構時間がかかったけれど、やっと肩の荷が下りたよ」とA1判の写真校正をもって先日も訪ねてくれた。この本は、初版の時も校正刷りから見せていただき、その時の表紙は先生ご自身でお書きになるほどの気合の入れようだった。初版の頃のことを懐かしく話していたら、「18年ぶりの改訂だからね」という。18年？ 18年もここで働いていませんよ、と返したところ、「いやいや、18年だよ、この新研究所に移ったのが12年前だからね」と。

たしかに2011年に現在の場所に移転し、その数年前から準備でみんな大わらわだった。先生の研究室は7階にあった図書室のちょうど裏側にあたり、そのころ図書委員長だったか、移転準備担当だったかよく新構想についてお話を聞かせてくださっていた。移転は他の研究所との統合でもあり、基幹システムから研究室や実験室の配置など、研究分野の異なる研究所間のしのぎあいが続いている、さらに親組織の思惑もあり、現場の研究者の思うようにはなかなか進んでいなかった。図書室の立ち位置も、住民にオープンなものにするために1階に設置したらどうか、床構造が特殊で蔵書が思ったより多かったので、書架の配置はこうがいいだろうか、など細かく検討され、結局は2階の吹き抜けフロアに落ち着いた。

しかし蓋を開けてみれば図書館の専門家が考えていない動線設計で、どこの図書館でもそうだろうが、とりわけ司書のための作業空間を確保できなかった。さらにこのオンライン・ジャーナルの時代に、タイトル300超用の固定雑誌架がどんと

部屋の中央に配置され、入り口からの視界を見事に遮っていた。この無用な雑誌書架はその後、不要物入れとして活躍した後、若手の事務員と財産登録をウルトラCで解除し、すべて撤去された。移転時から今のフロアレイアウトにするのに10年の月日が必要であった。このレイアウト変更時この先生の指揮の下で丸3年をかけて実行したが、「何事も自分の希望を進めるにあたっては、多分に政治的な立ち位置と配慮、一貫した振る舞いが必要である」と、先生の背中から教えていただいた気がする。そんな年月を思い出し、さらに移転前ののんびりした数年も加えて、おおよそ18年の月日が実感された。「もうそんなに？」というのが、正直な感想だ。10年後も「もうそんなに？」と言っている姿が想像できる。そのあつという間の年月の中でも、新しく来た人もいれば、去って行った先生もいる。その多くは出世して他大学等で長になっているので、たまに図書室によってくださったりする。

## 純粋に湧き上がる悦びそのものに向き合うために

そんな中に、研究所を離れて哲学を研究するためにフランスの大学院に行かれたY先生がいた。そのダンディな見かけに違わず、お話しも行動も素敵な方で、フランスに行かれてからもご研究の様子を他の先生からお聞きすることが多かった。フランスから帰国され、最近フランスにいたころの回想録「免疫学者のパリ心景 新しい「知のエティック」を求めて」(医歯薬出版、2022)を出版されていた。それは、定年退職6年前のある日、花粉症で自宅のソファで横になっていると、かつてボストンに留学した折購入したフランス語のカセットをふと思い出し、探してみると出てきたので、そのカセット全20巻を開き始めた。「その過程は何かの目標に向かうためではなく、純粋に湧き上がる悦びそのものに向き合うためにやるというもので、生まれて初めての経験」だったそ

うだ。何かのためにするという事は、その何かを達成するまでは「完了」しないため、我々を常に満たされない状態に置く。しかし、アリストテレスのいう「エネルゲイア」と同じく、やること自体が目的になっているため、やった段階ですべてが「完了」し、常に満たされた状態になるという。フランス語とフランス文化に触れるうちに、今までの研究生活と、自分の中に生まれた疑問を整理する時間を欲するようになり、先生はフランスでの長期滞在を考え始める。始めは、専門分野の召喚研究員などを探していたが、長期となると難しく、学生として滞在することを考えそして運命的な出会いがあって、フランスでの「全的生活」を模索するパリ大学の大学院生となるのである。その後パリ大学で修士、ソルボンヌ大学で博士、トゥール大学研究員などを経て、今は科学と哲学の普及をする研究会を起こされている。この本は、「週刊医学のあゆみ」に掲載された約10年のエッセイを元に、先生の観想生活をまとめたものだそうだ。

### 船旅の日記で始まる滞欧の記録

フランス留学中の回想録と言え、脳解剖学の萬年甫（まんねんはじめ）先生の「滞欧日記1955～1957」（中山書店、2016）がある。萬年先生は中枢神経系の研究では大家でおられるが、30代前半の1955年からフランス政府給費留学生として17か月間フランスに滞在された。その間毎週家族に送った書簡を元に、晩年日記の形に編集し出版された。書き出しは実父の書いた出港時の様子からはじまる。10月1日に横浜を出港し、神戸、香港、マニラ、サイゴン、シンガポール、コロンボ、ジブチ、エジプト、スエズ運河を経て11月3日にマルセイユに到着する。その間の船旅は、送られてくる写真と一緒に日記風に詳しくつづられており、ご家族はまるで同船しているかのように楽しまれたことだろう。パリについて、クロワッサンとココアの朝食、節約のための安い葡萄酒、お湯が出る日の洗濯、観光と観劇、研究室の見学、図書室での読書、留学仲間、研究の上司・同僚との会話などに、政治や社会情勢を

織り交ぜながら、外国で暮らす日本人の心構えを教えてくれる。1ドル360円の時代、研究の合間に、パリを中心として、スペイン、北欧、オランダ、ベルギー、ドイツ、スイス、オーストリア、イタリアと研究所を見学・観光し、さながら一緒にヨーロッパ旅行をしているようだ。1957年の年始に帰途につく。帰りは地中海からカナリア諸島、船の中では行きとは異なるリラックスした雰囲気、トランプや立ち寄り陸を楽しみ、船内図書室にあった永井荷風「ふらんす物語」、ジョルジュ・デュアメル「日本」を読み、サロンで雑談し、南回帰線、喜望峰を通過する。「十時過ぎ、一際強いその灯台の灯が水平線に現れる。それが次第に近づく頃、その向こうに雲を橙に彩って月の出。殆ど満月。同時に波がきらめき、まったく印象的。この岬を回り、アフリカ大陸の果てるのを確かめ、インドへの道を究めたヴァスコ・ダ・ガマの壮挙を思う。」船内では、レコードコンサート、映画、プールなど、シンガポールを経てマニラ、香港、横浜と旅は終わる。

この手紙を萬年先生の豆な実父が厚さ数センチのb4ファイル3冊分にまとめて保管していた。それを奥様がワープロにおこされ、病床の先生から娘へとリレーで編集し没後出版された。給付金の少なさ、物価の高さに辟易している描写は、さながら現代の欧州留学と通じるかもしれない。「滞欧日記1955～1957」は813ページで、全部はとても読めないが、徒然拾い読みしていても、そのころのフランスの、研究所の、萬年先生の息遣いが感じられる本である。

萬年先生は、東京医科大学を定年退官間際の1988年に『A dendro-cyto-myeloarchitectonic atlas of the cat's brain 猫脳ゴルジ染色図譜』を刊行された。この猫脳アトラスは、萬年先生が猫の脳切片をゴルジ染色・ニッスル染色・ワイゲルト染色し顕微鏡を見ながら書かれた脳神経の図177枚を、奥様とお弟子さんだったI先生が9色に彩色トレースされたという大変貴重なもので、素人目で見ても大変美しいもので、76×65cmのA2判くらいの図譜と解説書が木箱に入っている。I先生も、研究所を退官され、本好きのI先

生が古本屋で収集された1800年代の貴重な寄贈書がブックトラックで整理登録を待っている。

## 須賀敦子全集

今年の4月頃、動物の脳の研究を長くされているN先生が、「私はこの人がとても好きなのですが、あなたも一冊読んでみませんか？」と全集の中から第1巻を貸してくれた。須賀敦子全集だった。私はこういう分野は全く読んだことがなかったのだが、ありがたくお借りして、每晚枕の友にさせていただいた。須賀敦子は一時期ブームになったそうなので、エッセイや紀行などが好きな人はよくご存じかもしれない。20代で神学の勉強をするためにパリに行き、一度帰国した後再度イタリアに渡り、そこでコルシア書店のメンバー、イタリア人のジュゼッペ・ペッピーノ・リッカと結婚する。全集第1巻には、デビュー作の「ミラノ 霧の風景」「コルシア書店の仲間たち」「旅のあいまに」などが収録されている。須賀敦子の文体になれるのに時間がかかったが、枕元の手元ライトをつける時間になると、毎晩ミラノの石畳を歩き、書店の仲間と噂話をしながら簡素な食事をし、パトロン of 貴族マダム邸宅に招かれ、鉄道脇の小屋で過ごし、ひと月かかってやっと読み終えたのである。

## モンテロッソ・アル・マーレへの旅

そういえば、18年前私はイタリアに行ったのだった。研究所に勤め始めて最初の年で、旧友とニースからピサ、フィレンツェ、ヴェネツィア、ミラノに抜ける鉄道の旅だった。飛行機は成田からパリへ、国内線でニース空港に降り立った。シャガール美術館に行った後ゴッホの「夜のカフェテラス」近くのホテルに一泊。そこから汽車の旅が始まる。モナコの手前でエズ村という小さな村に立ち寄った。エズ村は海から垂直に切り立つ崖の上の町で、地中海に向かってスペインやローマ艦隊からの攻撃から身を守る城塞やシャトーがある。渋谷のスペイン坂よりも急な石畳を上るとサボテンのある熱帯植物園があり、街並みそのものがカワイイ素敵な街だった。その後、モナコを経てイ

タリアへ行く電車に乗ったものの、途中の駅でなぜかみんな乗り換える。どうしたのかしら、と二人できょろきょろしていると、一緒に電車に乗っていた親切な人が、電車のトラブルがあったから向こうの電車に乗り換えるのよ、早くしなさい、と英語で教えてくれて、あたふたと荷物を抱えて列車を乗り換えた。

モナコには、大学生の時に幼少期から習っていたお琴の先生が、モナコ公国の日本フェスティバルだかにお呼ばれして、一緒に連れていってくださった。着物を着て歩いていると「チャイニーズ？」といわれて、違いますといったのが思い出される。列車はモナコを過ぎてイタリアに入り、海岸線をくねくねとトンネルをぬけて、ジェノバを通過していく。ジェノバは母を訪ねて三千里のマルコが住んでいた町。ここからお母さんをさがしてアルゼンチンに船で行くのだよ。地理の得意な人は、ミラノ・トリノ・ジェノバの工業三角地帯で知っているかもしれない。

コートダジュールやプロヴァンス地方、イタリアなどの海岸線の村は、切り立った崖の上に鷲の巣のように村がある。モンテロッソ・アル・マーレもそんな村で、チンクエ・テッレと呼ばれる5つの景勝地が世界遺産に登録されている。今日は駅から歩いて数分のところに宿を予約してあった。ホテルというより海辺のアパートのようなB&Bで落ち着いた雰囲気宿だった。車の入れないチンクエ・テッレに行くには渡し船が必要で、船頭のおじさんにぼられそうになりながら村に到着し、石畳の細い坂道を歩いて散策し、道端のバルで夕食をとった。イタリアの海岸線の村はみんなそうかもしれないが、家の壁の色がとてもカラフルで、サーモンピンクやレモンイエローの小さな家が重なり合っている街並みの中、地元の人たちと混じって食べる魚料理と生パスタがとてもおいしかった。村の広場には教会があり、そこから四方に道が伸びている。

翌日、ホテルで目が覚めると、部屋が暗い。ヨーロッパのホテルは窓が小さいし、間接照明だから、と電気をつけようとしても付かない。電球が切れたようだよ、と言っていたら、実はホテル中

真っ暗で朝食の支度も困っていた。宿の人も、良くあることといった具合で、特に騒ぐでもなくできることをしている。まあ、きょう出発だから問題ないね、と朝ごはんもそこそこに駅に向かい、何もないホームで電車をまった。しかし、ピサへ向かう電車は、大規模な停電のために来ないのであった。

### Do the hokey pokey

さあ、困った。モンテロッソはジェノバとピサのちょうど中間。ピサでは斜塔見学の予約をしていた。そんな旅の記憶も、たどってみれば実に鮮明に思い出される。著書の改訂版を10年以上あ

ためていた先生も、帰国後40年もたってから「滯欧日記」を出版された万年先生、イタリアでの生活をエッセイにした須賀敦子氏もきっと同じように、記憶をたどっておられたのだと思う。一度しか見たことのない石畳の色、軒から下がる看板の形、宿の間取りがまざまざと思いだせるのはなぜだろう。三日前の夕飯も思い出せないのに、人間の記憶とは本当に面白いものである。新しい学びを得たい、という純粋な喜びのためにしたことは、行動すること自体に目的があり、すなわちすでに完了し常に満たされた状態で記憶として結晶化されるのかもしれない。

(たかの ゆうこ：医学系研究所図書室)

### DMがたろく

**第39回**  
**香・大賞 作品募集**  
 「香り」について自由に表現したエッセイを募集します。

応募規定：800字  
 審査員：鷲田 清一・池坊 専好・澤西 祐典・畑 正高  
 賞・副賞：金賞1名 副賞30万円 他各賞あり  
 締 切：2023年11月30日(木) 当日消印有効  
 発 表：2024年6月下旬

応募票のご請求・お問合せは 香老舗 松栄堂「香・大賞」係まで  
 〒604-0857 京都市中京区烏丸通二条上ル東側 TEL.075(212)5591  
 ※応募票をご請求ください。入賞作品集『かおり風景』を送付いたします。

香老舗 松栄堂WEBサイトで「香・大賞」の情報をご覧いただけます。  
 Facebook「かおり風景」で過去の入賞作品を定期的に投稿しています。

主催：「香・大賞」実行委員会・香老舗 松栄堂  
 後援：環境省・日本経済新聞社 大阪本社  
[www.shoyeido.co.jp](http://www.shoyeido.co.jp)



# Think Asia

NO.52 2023 summer-autumn

東京にやってきたチャンドラ・ボースの息子たち・・・伴武澄  
 タロイモ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・西井和弥  
 タイのお守り プラクルアン・・・シュムブラング・ナッタデット  
 世界を駆けたマエストロ・近衛秀麿・・・・・・・・ 石戸信也  
 龍の爪の数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・丁美堂

一般財団法人 霞山会(文化事業部)  
 〒107-0052 東京都港区赤坂2-17-47  
 電話:03-5575-6301 / FAX:03-5575-6306  
<https://www.kazankai.org/>

# CATHOLICA

カソリカ

## カトリック表象大全

スザンナ・イヴァニッチ 著  
 金沢百枝 日本語版監修

絵画、彫刻、建築、衣装、  
 装飾、装身具などで彩られ  
 た、キリスト教・カトリッ  
 ク教会の視覚文化を一望す  
 る図鑑。

定価：4180円(税込)  
 TEL.03-5390-7531  
 FAX.03-5390-7538





東京書籍

# BOOKMARK

FREE BOOKLET (ブックマーク)

20  
 2023 SPRING  
 巻頭エッセイ  
 斉藤 倫

詩の本特集  
 It will resonate



飯田 隆  
**増補改訂版  
 言語哲学大全Ⅱ**

意味と様相(上) 不朽の名著の増補改訂版、第Ⅱ巻が登場。 3520円



権文善一  
**ちょっと気になる  
 医療と介護 [第3版]**

高齢化と人口減少の中で、医療・介護ニーズはどう変わる? 2750円



**勁草書房** TEL 03-3814-6861 \*価格税込  
 FAX 03-3814-6854  
 〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1 <https://www.keisoshobo.co.jp>

数学にはこんなマーベラスな  
 役立て方や楽しみ方がある  
 という話を 数学セミナー編集部 [編]

**あの人やこの人に  
 ディープに  
 聞いてみた本** ①② ●8月下旬刊  
 ③ ●9月上旬刊  
 ※全3巻

各界の第一線で活躍する方々が「数学愛」を語る!

各分野で活躍する方々が、数学との関わりや意外な使い方、楽しみ方を思う存分に語る。《数学セミナー連載「数学トヴアース」》を書籍化!  
 ■第1巻では青柳碧人氏、第2巻では棋士の広瀬章人氏、第3巻では実業家の川上量生氏などが登場!  
 ●予価各1980円(税込) ISBN ①978-4-535-79005-6 ②79006-3 ③79007-0

**日本評論社** 〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4  
 ☎03-3987-8621 <https://www.nippsy.co.jp>

**図解**

はじめて学ぶ  
**物理の  
 せかい**

浜崎絵梨 訳  
 松浦壮 監修

小学校高学年から

力学、波、電磁気から、宇宙や量子力学の最前線まで、幅広いテーマをビジュアルで学べる入門書。 1980円

**晶文社** 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-11  
 Tel 03-3518-4940 <https://www.shobunsha.co.jp/>

YOASOBI、米津玄師、ADO、NewJeans……新時代のポップスがもっと楽しめる、「耳寄りな学問」によるこそ! オノマトベ、音象徴、ポケモン言語学など、最新の学術研究もふまえて、人気アーティストたちによる魔法のような「作詞術」をめぐる論考してゆく。言語学+音声学+認知心理学+脳科学=「音声詞学」の入門書。



四六判 / 342頁  
 定価 2,970円(税込)

**白水社** 101-0052 東京都千代田区神田小川町3-24  
[www.hakusuisha.co.jp/](http://www.hakusuisha.co.jp/) tel.03-3291-7811

**歌詞のサウンドテクスチャー  
 うたをめぐる音声詞学論考** 木石岳 [著]


**世の中を知る、  
 考える、変えていく**

高校生からの社会科学講義

飯田 高・近藤絢子・砂原庸介・丸山里美 編

「環境」「貧困」「テクノロジー」「ジェンダー」を軸に、経済学・政治学・法学・社会学のそれぞれの特色、着眼点、アプローチの仕方、問題意識を伝える。  
 文系学部への進学を考える高校生、現代社会の課題と向き合うヒントを得たい読者に。

7月31日発売 四六判 2,420円



**有斐閣** 東京都千代田区神田神保町2-17  
<https://www.yuhikaku.co.jp/> 価格は税込

**ESTRELA** ■2023年7月号  
 No.352/7月10日発行  
 B5判 64ページ  
 定価1,205円(税込)

〔特集〕PLATEAU ～3D都市モデルの整備とその活用～

- 都市のデジタルツインに向けた3D都市モデルの基盤化・標準化の意義  
 瀬戸 寿一(駒澤大学文学部地理学科 准教授)
- PLATEAU YOKOHAMAプロジェクト  
 小林 巖生(Code for YOKOHAMA 代表/インフォ・ラウンジ株式会社 副社長)
- 建物に関する様々な計測データの3D都市モデルへの効率的なマッチング  
 佐藤 剛(東京大学工学系研究科社会基盤学専攻 修士2年)

公益財団法人 統計情報研究開発センター(Sinfonica)  
 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5階  
 TEL: 03-3234-7471 <https://www.sinfonica.or.jp/>